

史などの観点からも「反東京オリンピック」を訴えるアンソロジ。なしくずし的に東京オリンピックの準備が進む。競技場問題にしても、カネの問題にしても、これだけ問題が噴出したなら、テレビも新聞も週刊誌も、いつのまにか歓迎ムードになっている気持ち悪さの中で貴重な本だ。

5 V・ジャンケレグイッチ『死』仲沢紀雄訳、みすず書房、一九七八年

ある仕事のため、死や病いについての本を集中して読んだ。若いころに読んだときは、まったく違う印象をもった。いつのまにか死は親しいものとなり、「じぶんのこと」になっていた。生まれたときから、死はいつもそばにあったはずなのに。

斎藤成也

(人類学)

1 安田敏朗『漢字廃止の思想史』平凡社、二〇一六年

2 宮正樹『シリーズ・遺伝子から探る生物進化4 新たな魚類大系統』慶應義塾大学出版会、二〇一六年

3 岡村昌弘原案監修・中村眞理子作『天智と天武』1-11巻、小学館、二〇一二年

4 佐々木閑・大栗博司『真理の探究』幻冬舎新書、二〇一六年

5 尾本恵市『ヒトと文明』ちくま新書、二〇一六年

1 大正から昭和にかけてひろげられた、カナモジ会などの運動を丹念におった労作。関西文化人の活躍がめをひく。訓よみ廃止国民運動のたちあげをかんがえている評者は共感をもった。逆に漢字が日本文化の中心にあるとする一部の人々は面くらうだろう。

2 長年DNA配列をもとにして魚類の系統関係を研究してきた著者の半生記。評者が声をかけて書いてもらった。あとがきに「あまりに過激な内容(新規の仮説)をたくさん含んでいるので、全国各地の大学の魚類学講座で『禁書』扱いにされないかどうか不安ではある。」とある。もっとも本書に登場する仮説の大部分はすでに論文として出版されている。

3 美形の兄弟とそのまわりの人々による七世紀後半のヤマト朝廷と朝鮮半島のうごき、日本書紀の記述をそれなりに忠実になぞりつつ、大胆な仮説をおりませた力作。白村江のあとの描写は疑問だが、母殺しの場面は衝撃的。法隆寺仏像のモデルが彼というのは新説?

4 仏教学者と宇宙物理学者の共著。まさに偶然の事象である宇宙創成時の量子ゆらぎこそが、星を生み、惑星上の生命をうみだしたという。物理学・数学に造詣のふかい佐々

木氏が的確な質問を大栗氏に投げかけることで、対談にリズムが生まれている。

5 子供時代から昆虫採集に親しんできた著者が、東京大学文学部と理学部を卒業したあと、ドイツ、東京大学理学部、国際日本文化研究センター、桃山学院大学、総合研究大学院大学での、人類学の研究生生活を総括した帯で福岡伸一氏が「尾本人類学の集大成」と絶賛。

竹内 洋

(社会学)

1 猪木武徳『自由の思想史——市場とデモクラシーは擁護できるか』新潮社、二〇一六年

自由をディレンマの関係にある「安全」や「平等」などの他の価値との関係でどう位置づけ、どう調和させ、使いこなすか。リベラル・デモクラシーの根幹を考えるための必読書。

2 木村洋『文学熱の時代——懐疑から頌揚へ』名古屋大学出版会、二〇一五年

近代日本文学史において無視されるか、軽視されがちな蘇峰を政治熱から文学熱への転機的作用をはたした人物、つまり近代日本文学の起點の人として論をはじめ。蘇峰を起點とする近代日本文学史を本書の著者以外誰が考えたであろうか。